

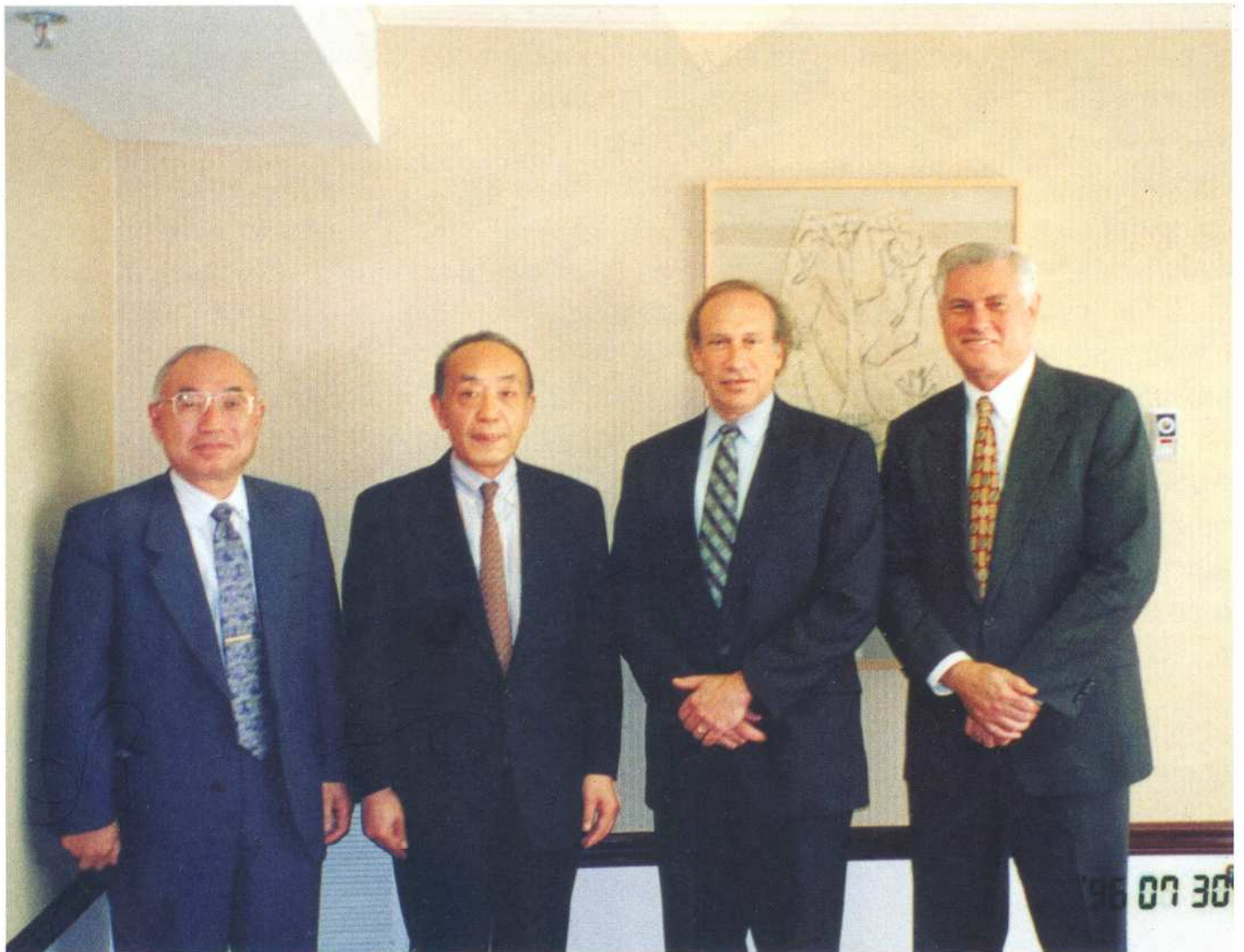


ocumentary

日米半導体協定の終結交渉 (第3回)

100社の命運を 背負った二人

病に倒れた大賀典雄に代わり、日本側交渉団のリーダーを務めることになった牧本。だが、1996年7月20日に始まった大詰め交渉は、双方が主張を譲らず平行線をたどる。交渉の最終期限である同年7月31日までに残された時間はあとわずか。次第に陰悪な空気が場を支配し始める。



最終交渉に臨んだ日米の民間代表および政府高官。左から順に、牧本氏、通商産業省 審議官(当時)の坂本吉弘氏、USTR 大使(同)のIra S. Shapiro氏、米Texas Instruments (TI) 社 Vice Chairman (同)のPat Weber氏。

(写真：加藤 康(p.97、p.98の左下))

4回目の交渉を翌日に控えた7月19日の朝。都内某所に、国内大手電機メーカーの社長が顔をそろえていた。夕方の便で日本を発つ牧本ら交渉団の壮行会が開かれたのだ。

集まったのは、日立製作所の金井務、東芝の西室泰三、松下電器産業の森下洋一、ソニーの出井伸之など、そうそうたる顔ぶれ。ホスト役は、通商産業省(現 経済産業省)の産業政策局長だった渡辺修が務めた。壮行会が企画されたのは、「半導体メーカーとユーザー企業、そして政府が気持ち一つにして、日米半導体協定にケリをつけようとの思いからだ」(牧本)。

「交渉団の皆さんにすべてを委ねます。悔いを残さないよう、全力で頑張ってきてほしい」

社長たちの激励の言葉を胸に、牧本らはバンクーバーに向け出発した。病に倒れ入院したソニーの大賀典雄と松下電器産業の豊永恵哉は日本側交渉団から外れ、新たに3人が加わっていた。東芝 専務(当時)の大山昌伸、三菱電機 常務(同)の新村拓司、NEC 専務(同)の小野敏夫、である。大山は半導体メーカー側、新村と小野は半導体ユーザー側の代表という立場だ。牧本は、メンバー4人のリーダーを務めることになった。

2極間か多極間か

バンクーバーのホテルでの7月20日の交渉は、午前9時に始まった。米国

側交渉団には、これまでの交渉に参加した3人に加えて、米Micron Technology社CEOのSteven Appleton(スティーブン・アップルトン)が名を連ねていた。アップルトンは当時30歳代半ば。米国の大手企業では最も若いCEOの一人だった。

一つのテーブルを挟んで、日米4人ずつが向き合う。前回までに双方の主張を明確にしていたことから、議論はこれまでになく具体的なものとなった。

最初に話し合ったのは「世界半導体会議(World Semiconductor Council:WSC)」の設立についてである。前回の交渉で、日本側が「ポスト日米半導体協定」の枠組みとして提案したものだ。日米半導体協定という2極間の取り決め苦しめられてきた経緯から、議論を多極的な場へ移そうというのが狙いだった。

東芝の大山が口火を切る。

「昨年、世界貿易機関(World Trade Organization:WTO)が設立されたことが示すとおり、貿易問題については多極間で議論するのが時代の潮流だ。半導体がこれに従わないのはおかしい」

一方の米国側にとっては、他国に干渉の余地を与えない2極間での議論にこそ意味があった。米LSI



Logic社(現LSI社)のWilfred Corrigan(ウィルフ・コリガン)が強い口調で応戦する。

「“World”を冠するような議論の場では、結局は何も決められない。参加国がそれぞれのエゴを主張するだけだ。日米2極間の議論の場を維持すべきであり、その名称は“World”を冠さない『半導体会議(Semiconductor Council)』がふさわしい」

“World”の名称は譲れない

米国側が前回に続いて強硬な姿勢を崩そうとしないことを見て取った日本側は、ここで妥協案を示す。当面はWSCを日米2極間の議論の場とし、後に韓国や欧州を加えて多極化するという提案だ。当時、韓国や欧州は半導体製品の輸入に関して特別関税を設けていた。その関税を撤廃することを条件に、WSCへの参加を

認めるという考え方である。

米Motorola社(当時)のTommy George(トミー・ジョージ)が険しい顔で言った。

「よろしい。ただし、当面は実質的に2国間交渉の場とするのなら、“World”を冠する必要はない」

名称の問題を蒸し返す米国側。だが、日本側にとっても「“World”を冠する点は譲れなかった」(牧本)。多極的な場とすることを少なくとも名前で担保しておかなければ、日米2極間という関係がなし崩し的に今後も続く恐れがあったからだ。

もっとも、トミー・ジョージの発言にも一理ある。返す言葉が見つからない牧本。その時、東芝の大山がこう切り返した。

「トミー、米国には“World Series(ワールド・シリーズ)”という国民的行事があるね。勝ったチームは、国内の覇者にすぎないのに“World Champion”



日本側交渉団メンバー。左から順に、東芝専務(当時)の大山昌伸氏、牧本氏、三菱電機常務(同)の新村拓司氏、NEC専務(同)の小野敏夫氏。



と称される。それを認めているあなた方が、日米の議論の場に限って“World”を冠するのは許さないなんて、理屈が通らんじゃないか」

一瞬の静けさの後、テーブルは爆笑に包まれた。トミー・ジョージも、これは一本取られたという顔で苦笑している。張り詰めた議論の中で唯一、和やかさが戻った瞬間だった。

コリガン、怒りの退席

「ようやく互いに本音で話せるようになってきたな。打開策が見つかるかもしれない」

牧本がそう期待したのも束の間。午後に入ると、交渉は「政府関与の維持」をめぐる再び膠着(こうちやく)状態に陥る。米国側は、外国製半導体のシェア・モニターをはじめとする政府関与を維持すべき、との主張を曲げようとしめない。日本側にとっても、シェア・モニターのような拘束力の強い政府関与を解消したい点は譲れな

かった。議論はまたも堂々巡りを始め、次第に感情的な発言が目立つようになる。

「あなた方はどうしてそうも石頭なんだ。悪いが、もう我慢ならない。私は降りさせてもらう!」

前回の交渉でも短気なところを見せたコリガンが、突然声を張り上げた。そのまま席を立ち、部屋から出ていってしまう。場は一瞬にして凍りついた。残された7人はしばらく待ったが、コリガンは戻らなかった。

コーヒー・ブレイクの間、牧本は米国側のリーダーである米Texas Instruments(TI)社のPat Weber(パット・ウェーバ)に声を掛けた。

「パット、困ったことになったね。でも、これはそもそも非常に難しい交渉だ。2年前に君と僕の会社がDRAMの合弁事業に踏み出したときは、もっとシンプルだった。2社が覚悟を決めればいいだけの話だったからね。だが今回は違う。君も僕も、100を超え

る母国の企業を代表して交渉に臨んでいる。互いに譲歩しにくいのは当たり前だよ。だからこそ、着地点を見つけるためには粘り強く話し合うことが肝心だ。一にも二にも、Patience (忍耐) さ」

UCOMの延長で譲歩を促す

このままでは米国側の譲歩を引き出せないと考えた日本側は、その日の交渉が終わりに近づいた頃、「用意していた“土産”を米国側に渡した」(牧本)。日米半導体協定に従い、外国製半導体の採用を促してきた半導体ユーザ協議会 (UCOM) の活動期間を延長するという提案である。協定が失効する1996年に解散する予定だったものを、1999年まで続けることを認めてもよいというのだ。もちろん、WSCの設立や政府関与の解消に関して、米国側の態度を軟化させるのが狙いだった。

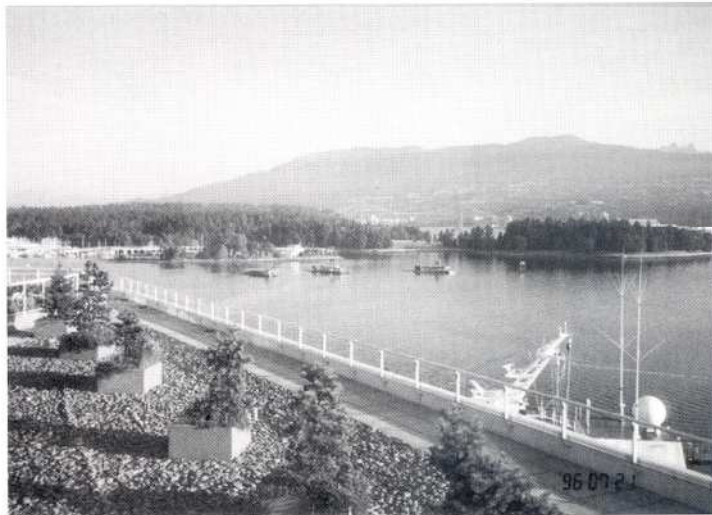
「UCOMについては、活動期間を3年間延長することにしたい。本意ではないが、ギリギリの妥協案として提案する。これで、外国製半導体のシェアが急落することをあなた方が懸念する必要はなくなる」

“ギリギリの妥協案”というくだりを牧本はひととき強調した。

結局、最後まで着地点を見出せないまま、交渉は19時に終了。休憩を挟んで、議論は10時間にも及んだ。

次の交渉日は7月29日と決まる。交渉の最終期限が7月31日であることを

1996年当時のバンクーバーの風景



考えれば、最後の交渉になる可能性が高かった。決戦の地は再び、バンクーバーである。

“ネバー・ギブアップ”

7月29日に始まった交渉では、政府高官による交渉と民間の交渉が並行して進められた。政府間の交渉には、通商産業大臣(当時)の塚原俊平の他、通産省の審議官だった坂本吉弘、先の壮行会を取りまとめた同省産業政策局長の渡辺修らが参加。米国側の政府高官は、米通商代表部 (USTR) 副代表の Charlene Barshefsky (シャーリーン・バーシェフスキー)、USTR 大使の Ira S. Shapiro (アイラ・シャピロ) などだった。

日本側交渉団は、政府と民間を合わせて総勢30人ほど。米国側もほぼ同数だった。前回、突然の退場劇を演じたウィルフ・コリガンも再び顔を見せている。いよいよ間近に迫るタイムリミットを前に、日米のすべての

担当者が「7月31日までに必ずケリをつけるという意志を共有していた」(牧本)。

7月29日の朝、民間の交渉が始まる前に、牧本は再度、パット・ウェーバと二人だけで話をした。

「いよいよここまで来たね。交渉の難しさはお互いに身にしみているけれど、決裂で終わらせるわけにはいかない。君と僕の祖国に、将来にわたる禍根を残してしまうからね。僕は絶対に最後まで諦めないし、君にもそうしてもらいたい。ネバー・ギブアップでいこう」

交渉団のリーダーだった牧本とパットの間にかこうした信頼関係がなければ、日米がその後も粘り強く交渉を続け、最終合意に至ることはできなかったかもしれない——。東芝の大山は後年、そう振り返っている。

＝敬称略

——次回に続く——

(大下 淳一) 図